

一、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ある日、書店主A・J・フィクリーの店で一通の書き置きがそえられた捨て子マヤ（二歳）が発見される。第一発見者であり、また書き置きの中でマヤの養育をたのまれていたフィクリーは、いやいやながらも行きがかり上、この子を一時的に預かることを了承するが、数日ともを過すうち、彼の心にマヤに対するほのかな愛着がめばえてきてしまう。やがて正式な里親さがしの手続きをすすめるため、児童福祉局から派遣されたジェニーがマヤを引き取りに来るのだが……。

「つまりですね……通常は認められないでしょうが、でもこの子の母親がこの手紙をぼくに残していったんです」彼はその手紙をジェニーにさしだす。「母親はぼくにこの子を預けたいといっているんですよ。それが母親の最後の望みだった。ぼくがこの子を預かるのが本筋じゃないだろうか。ここにしかるべき家があるのに、どこかの知らない里親の家にこの子を行かせたくない。この問題はゆうべグーグルで調べました」

「グーグル」とマヤがいう。

「この子、この言葉がお気に入りですね、どういうわけか知りませんが」

「問題ってなんですか？」とジェニーが訊く。

「この子をぼくに預けるのが母親の希望である場合、この子をよそに引き渡す義務はないということです」A・Jは説明する。

¹「パパ」とマヤがうまいタイミングでいう。

ジェニーはA・Jの目からマヤの目に視線をうつす。²ふたりの目は、腹立たしいほど決意にあふれている。彼女はためいきをつく。きょうの仕事は簡単だと思っていたのに、厄介なことになってきた。

ジェニーはもう一度ためいきをつく。これは初仕事ではないけれど、ソーシャル・ワーク科の修士課程をわずか一年半前に終えたばかり。ふたりを助けてあげたいと思うほど純真だし、未経験でもある。そうはいつでも彼は店舗の上に住んでいる独身の男だ。事務手続きは厄介だろう、と彼女は思う。「教えてください、フィクリーさん。あなたには、教育とか、育

児とかの経験がおりなのかどうか」

³「うーむ……ぼくは、本屋を開業するために大学院をやめるまで、アメリカ文学の博士課程にいました。専門は、エド

ガー・アラン・ポーです。『アッシャー家の崩壊』は、子供をこう扱ってはいけないという、格好の入門書にはなりますね」
「それはまあ、ないよりましというか」とジェニーはいうが、それはまったく役に立たないという意味だ。「ご自分が、こ

うしたことに適しているとお思いですか？ たいへんな財政的、心理的、時間的な負担がかかりますが」
「いや」とA・Jはいう。「自信はない。でもマヤは、ほかのひとといっしょにいても、ぼくといっしょにいても、よいチャンスに恵まれると思いますよ。仕事をしているあいだも、この子のおもいはできるし、おたがいに好き合っていると

うし」

「すき」とマヤがいう。
「そう、いつもこうなんですよ」とA・Jはいう。「自分でかちとったわけでもない愛情をむやみにふりまくると警告して

いるんだけど、正直いうと、これはあのゆだんのならないエルモの影響だと思っんですよ。あいつはだれでもみんな好きになるから」
「エルモはわたしもよく知ってます」とジェニーはいう。彼女は泣きたい。事務手続きが山ほどあるだろう。それも里親を決めるためだけに。養子縁組というものは、ただでさえ難しいものなのに。児童福祉局の職員がマヤとA・Jの様子を

チェックしようと思うたびに、ジェニーはアリス島まで二時間の旅をしなければならぬ。「オーケー、おふたりさん、上司に電話してみましょう」マサチューセッツはメドフォード出身の、堅実で愛情豊かな両親の産物であるジェニー・バーンスタインは、少女時代、「赤毛のアン」や「小公女」みたいなみなしご物語が大好きだった。ああいう物語をくりかえし読んだための好ましくない影響が、自分にソーシャル・ワーカーという職業を選ばせたのではないかと、彼女は近ごろ思うようになった。だいたいこの仕事は、ああいう本を読んで信じこまれたようなロマンチックなものではない。昨日は、かつてのクラスメートからこんな話を聞かされた、ある養母が、ろくに食べ物にあたえなかったために、十六歳の少年の体重が二十キロになってしまったという話。隣り近所のひとたちは、この少年が六歳の子供かと思っていたそうだ。「あたしはそれでも、ハッピー・エンドを信じたいわ」とクラスメートはいった。「でもだんだんそれがむずかしくなっていくのよね」

ジェニーはマヤに笑いかける。なんとという幸運なおちびさんかと、ジェニーは思う。

クリスマスからこちら、さらに数週間たつたいまも、アリス島は、男やもめの本屋の主、A・J・フィクリーが、捨て子を家で世話しているという噂でもちきりだ。これはアリス島における——おそらく「タマレーン」の盗難以来の——もつともしがいのある噂話で、A・J・フィクリーという男の性格を考えれば、だれもが興味津々になるというもの。町のひとは、彼を偉ぶった冷たい人間だと考えてきた、そんな男が自分の店に置きざりにされていたという理由で、その子を養女にするとどうい信じがたい。町の花屋によれば、サングラスをアイランド・ブックスに置き忘れ、その日のうちに取りにもどつたら、A・Jはもうそれを捨てちまったという。「やつがいうにはな、自分の店は遺失物保管所じゃないんだと。あれはヴィンテージもののすばらしいレイバンだったのになあ！」と花屋はいう。「これが生身の人間だったら、どういことになるかねえ？」さらにA・Jは、長年、町の生活にかかわるよう求められてきた——サッカー・チームのスポンサーになってくれとか、やれ自家製菓子のバザーを後援してくれとか、やれ高校の卒業記念アルバムに広告を出してくれとか。あの男は応じたためしかなかったし、それも丁重にお断りするというわけでもない。ただ「タマレーン」の紛失以来、A・Jがいくらか軟化してきたことは、町のひとたちも認めている。

アリス島の母親たちは、子供がほうっておかれるのではないかと心配している。独り身の男が子供の養育についてなにを知っているだろう？ 母親たちはそれを口実にひんぱんに店に立ち寄り、A・Jに助言をしたり、ときには小さな贈り物をもつていたりする——幼児用の古い家具、洋服、毛布、おもちゃなどなど。マヤが見るからに清潔で幸せそうで、自信に満ちていることを発見して、みんな驚いている。ただみんな店を出たあとに、マヤの過去の悲劇的な事件を持ち出しては舌打ちをする。

6 A・Jとしてはこうした訪問を気にはしていない。助言はあらかた無視している。贈り物は、一応受けとっている（ご婦人がたが帰ったあと、それらを勝手に仕分けして消毒する）。店を出た客たちが舌打ちすることは知っていても、腹は立っていないようにしている。消毒用のピュレルのボトルをカウンターにおき、そのとなりに、へ女王さまに触れる前にどうぞ手の消毒をしてください」という立て札はおいている。母親たちは、A・Jの知らないことをいろいろ知っている。トイレの訓

練（お菓子やおもちやで懐柔できる）とか、歯が生える時期とか（歯茎が痛いときには面白い形をしたアイス・キューブで冷やす）とか、予防注射のこととか（水疱瘡の予防注射はしなくてもいい）などなど。育児の助言を求めるとは、グーグルは広範囲の知識はあるが、哀しいかな、それほど深い知識はない。

ご婦人がたの多くは、子供を訪ねるついでに本や雑誌も買ってくれる。A・Jは、新しい本の仕入れもはじめる、なぜならご婦人がたは、本についてもあれこれ話し合っただらうとA・Jは思ったからだ。しばらくのあいだ、この婦人サークルは、有能すぎる女性が厄介な結婚にはまるといふ現代小説に好ましい反応を示した。その女性が浮気でもすれば大喜び——むしろここのご婦人がたが浮気をしているというわけではない（あるいは、浮気をした経験があると認めるむきもあるかもしれない）。ご婦人がたの愉しみは、こうした女性たちに審判を下すこと。わが子を捨てる女性となると、これはいきすぎだが、恐ろしい事故に遭った夫はおおむねあたたかく受け入れられる。（その夫が死んで、妻が新しい恋人を見つければ、追加点が入る）。メイヴ・ピンチーにしばらく人気があつまる、前世では投資銀行家だったというマージーンが、ピンチーの小説はあまりにも陳腐だと不平をならすまでは、「いったいどれだけ読まされるの、若い娘がハンサムなワル男と、息が詰まりそうなアイルランドの町で結婚するって話」そこでA・Jが、図書館の司書並みのお仕事にせつせと励むことになる。「この読書クラブをつづけるつもりなら」とマージーンがいう。「もつとバラエティーがあつたほうがいいんじゃないかしら」

「これは読書クラブなんですか？」とA・Jは訊く。

「そうでしょ？」とマージーンがいう。「あなた、この育児相談が、まさか無料だとは思わないでしょ？」

四月は、『ヘミングウェイの妻』。六月は『頼りがいのある妻』。八月は『アメリカの妻』。九月は『タイム・トラベラーズ・ワイフ』。十二月には、題名に「妻」という言葉がつく手ごろな作品は底をついた。そこでみなは『ベル・カント』を読む。

「絵本の売り場をもつとひろげてもいいんじゃない」いつもくたびれたようなペネロピがいう。

「子供たちもここにいるときは、なにか読まない」とご婦人がたは、マヤといっしょに遊ばせようと自分のチビたちも連れてくるので、それは当然だろう。いうまでもなくA・Jは、『この本の最後にモンスターがいる』は読みあきています。以前

は絵本にはとくに関心がなかったが、このさい、専門家になってやろうと決心する。マヤには、文学的な絵本を読んでもらいたい、そういうものがあればだが。なるべくなら現代の絵本を。なるべくなら、いつそフェミニストの本を。王女さまの出てくる本はもうけっこう。彼の条件にかなう絵本はたしかに存在することが判明する。ある晩、彼はこうつぶやいている自分に気づく。「本の形態として、絵本は短篇小説と同じ優美さをそなえているんだな。ぼくのいつていることがわかるかい、マヤ？」

マヤは真面目くさってうなずき、本のページをめくる。

「こういう絵本をつくるひとの才能はすばらしいね」とA・Jはいう。「正直いって考えもしなかった」

マヤは本をたたく。ふたりは「まめぼうやのリトル・ピー」を読んでいる、甘いお菓子をちゃんと食べたなら、デザート野菜をもらえるえんどう豆のお話。

「これをアイロニーというんだよ、マヤ」とA・Jはいう。

「アイロン」とマヤはいう。そしてアイロンをかけるしぐさをする。

「アイロニー」と彼はくりかえす。

マヤは首をかしげる、そしてA・Jは、いつかアイロニーについてマヤにちゃんと教えようと思う。

ランビアーズ署長は店をひんばんに訪れる、訪れる口実に本を買う。ランビアーズは無駄遣いはしないたちだから、買った本はかならず読む。はじめのうちは主にペーパーバックを買っていた——ジェフリー・ディーヴァーとジェイムズ・パターソン（あるいはジェイムズ・パターソンと共著で書いているだれやら）——それからA・Jは、ジョー・ネスボとエルモア・レナードのペーパーバックに彼を進級させる。このふたりの作家は、ランビアーズもおおいに気に入ったので、A・Jは、彼をさらに、ウォルター・モズリー、それからコーマック・マッカーシーへと進級させる。A・Jの最近のおすめは、ケイト・アトキンソンの『探偵プロディの事件ファイル』だ。

ランビアーズは、店にやってくるとすぐ本の話をしたがる。「ところでさ、おれははじめはどっちかというところであの本が嫌いだっただけだね、ところがだんだんあいつのよさがわかってきたんだよ、なあ」彼はカウンターに身をのりだす。「だって

さ、あれは刑事の話だもんな。だけどどうもテンポがのろくてさ、おまけにほとんどなにも解決しないんだよ。だけどさ、ちかごろおれは考えた、それが人生というもんだってね。この仕事はじっさいこんなものなんだってね」

「続篇がありますよ」とA・Jは教える。

ランビアーズはうなずく。「それにのったもんかどうかねえ。ときどき、なにかも解決してもらいたいと思うんだ。悪人は罰せられる。善人は勝つ。そういうことさ。またあのエルモア・レナードのご同類じゃないのか。ねえ、A・J、おれはずっと考えてきたんだよ。あんたとおれとで警官たちのための読書会をはじめられるんじゃないかって。そう、おれの知ってるお巡りどもも、こういう小説が好きかもしれないだ、おれは署長だからさ、やつらにここで本を買わせる。なにもお巡りに限ったことはない。犯罪捜査関係に熱中している連中でもいい」ランビアーズは両手にビュレルの消毒用ジェルをつけて、それから腰をかかめてマヤを抱き上げる。

「よう、別嬪さんや。どうしてる？」

「養女になった」とマヤはいう。

10 「たいした言葉を知ってるねえ」ランビアーズはA・Jを見る。「おい、それはほんとの話かい？　ほんとにそうだったのか？」

手続きには通常の間時間を要したが、マヤの三度目の誕生日の前の九月には決着がついた。A・Jに不利な点は、運転免許がないことと（例の発作があるので免許はとったことがない）、それからもちろんひとり身で子供を育てたこともないし、犬や植木鉢の世話をしたこともないという事実だった。最後には、A・Jの学歴と地域社会との強力な絆（すなわち本屋）と、そして母親がマヤを彼のもとに託していったという事実が、不利な点をしのいだのである。

（ガブリエル・ゼヴィン著・小尾美佐訳『書店主フィクリーのものがたり』）

⑩ ソーシャル・ワーク科IIソーシャル・ワーカーの資格を得るための学科。ソーシャル・ワーカーとは社会的に困っている人の相談にのり、その支援を行うための仕事をしている人のこと。

エルモアアメリカの子ども向け番組「セサミストリート」の人気キャラクターのこと。

男やもめ妻を亡くした男性のこと。

『タマレーン』はフィクリーの家から少し前に盗まれたエドガー・アラン・ポーの詩集。非常に手に入りづらく、売れば高い値のつく本

で、フィクリーが最も大切にしていた。

アイランド・ブックスはフィクリーが営む書店の名前。

懐柔できる自分のいいように手なずけることができる。

ペーパーバックは安い紙に印刷された手にとりやすい本。

問一——線部1「『パパ』とマヤがうまいタイミングでいう」とあるが、どういふことを「うまいタイミング」と言っているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア フィクリーが説得に夢中になり、ついジェニーに対して感情的になってしまったちょうどその時に、マヤが「パパ」といったことで、フィクリーは落ち着きを取りもどし、その場に張りつめていた空気がゆるんだということ。

イ フィクリーがマヤを引き取ればよいとジェニーが少しずつ思い始めてきたちょうどその時に、マヤが「パパ」といったことで、ジェニーは二人の強い絆を感じ、二人の養子縁組を認める決心がやっとなったということ。

ウ フィクリーがマヤを引き取る正当性を主張しているちょうどその時に、マヤが「パパ」といったことで、マヤのフィクリーに対する信頼がジェニーにも自然と伝わり、フィクリーの主張に説得力が生まれたということ。

エ 簡単に仕事を済ませようとジェニーがフィクリーの話を適当に聞いていたちょうどその時に、マヤが「パパ」といったことで、ジェニーは二人の真剣な思いに気づき、フィクリーの話をしっかりと聞く気になったということ。

問二——線部2「ふたりの目は、腹立たしいほど決意にあふれている」とあるが、なぜ「ふたりの目」が「決意にあふれている」ことが「腹立たしい」のか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二人が共に暮らしていきたいと望むことは、すぐにマヤを引き渡してもらえらると思っていたジェニーにとって、仕事か思っていた以上に面倒になることを意味するから。

イ 二人の決意が固いということを見せつけられれば、ソーシャル・ワーカーになりたてのジェニーなら簡単に説得できるとみくびっているのではないかと思つたから。

ウ 二人がジェニーの説得に負けまいと結束していることは、マヤの幸せのためにこの島にやってきたジェニーにとって、いわれない敵意を向けられていくように感じられることだから。

エ 二人が家族になりたいと強く願うのは良いが、そのためにはジェニーが厄介な手続きをしなければならないということにまったく気がついていないのではないかと思われたから。

問三——線部3「うーむ……」とあるが、この時のフィクリーの気持ちはどのようなものか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 教育や育児の入門書として最適な『アッシャー家の崩壊』を読んではいるが、読書は経験とはいえないので口に出すのをためらっている。

イ 教育や育児の経験はほほないので、ここでは相手に弱みをみせないために嘘をついてでもその場をやりすごそうと苦心している。

ウ 教育や育児の経験については『アッシャー家の崩壊』の話が役立つと思う一方で、相手がポーを知っているかという点に不安を感じている。

エ 教育や育児の経験はないが、相手を納得させるために何かしらもつともらしいことを言わなければならないと思いをめぐらしている。

問四 ――線部4「好ましくない影響」とあるが、なぜ「好ましくない」と言っているのか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 少女時代に読んだみなしご物語の主人公たちの苦労の方が胸に深く刻まれてしまったために、マヤのようなみなしごたちを幸せにする手助けをしてあげられると心から信じて仕事を進めることができなくなってしまったから。

イ 少女時代に読んだ物語のようにみなしごたちの人生をハッピー・エンドに導くことが自分の使命だと信じこんでこの仕事についたのに、実際には事務手続きの苦労が先に立って、子供の幸せを第一に考えてやれないから。

ウ 少女時代に読んだハッピー・エンドのみなしご物語のように、みなしごたちが幸せになるために働くのだと思ってこの仕事を選んだが、実際にはそんなロマンチックなものではなく、落ち落胆や苦しみを感じることも多いから。

エ 少女時代に読んだハッピー・エンドのみなしご物語がみなあまりにロマンチックなものだったので、実際に厳しいみなしごたちの現実を目の当たりにしても、それを強引にハッピー・エンドだと思いきもうとしてしまうから。

問五 ――線部5「みんな驚いている」とあるが、なぜ「驚いている」のか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他人に対して思いやりがなくて有名だったフィクラーが、自分の店にたまたま捨てられていたということだけで、その子を大切に育てるとは思えなかったから。

イ いつもケチだったフィクラーが、店に置き去りにされていたのがかわいそうだという理由だけで、その子の養育のために自分のお金を使うとは思えなかったから。

ウ いつも他人を見下すような態度をとっていたフィクラーが、店に置き去りにされていた子を育てるためとはいえ、自分たち母親の助言をまともに聞くととは思えなかったから。

エ 冷たくていつもイライラしていたフィクラーが、店に捨てられていた子を育てることになったからといって、急に自信を得ておだやかになるとは思えなかったから。

問六 ――線部6「A・Jとしてはこうした訪問を気にはしていない」とあるが、A・J・フィクラーは「アリス島の母親たち」に対してどのような態度で接していると言えるか。その説明として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母親たちが驚くほどに、自分はマヤの父親として子育てを完璧かんぺきにこなしているという自信をもっており、母親たちの助言や贈り物などには必要ないものとして無視している。

イ 自分やマヤに関する母親たちのおせっかいな言動にいちいちふりまわされることなく、自分たちの役に立つ情報や贈り物については受け入れて活用することになっている。

ウ 母親たちがマヤを自分から取り上げようとしていることに気づかず、グーグルで得られぬ知識をありがたがり、彼女たちが喜ぶような本を仕入れるサービスをしている。

エ 母親たちのことをマヤに害をもたらし存在として内心嫌っていたが、自分に不足している子育ての知識を補うため、表面的には彼女たちを受け入れるふりをしている。

問七 ――線部7「あなた、この育児相談が、まさか無料だとは思わないでしょ？」とあるが、マージンがフィクラーに言おうとしているのはどのようなことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちが子育ての経験からフィクラーに助言しているのだから、フィクラーも書店主の経験をいかして本の読み方を教えるべきだということ。

イ 自分たちが子育てについてフィクラーに助言をするお礼に、フィクラーが自分たちの好みの本を書店にそろえておくのは当然だということ。

ウ 自分たちがマヤの子育てについて相談にのる代わりに、フィクラーは自分たちが楽しく読めるような本を無料で配らなくてはならないということ。

エ 自分たちがフィクラーの子育てを手助けする見返りに、自分たちが共感できるような有能な女性が出てくる本を無料で紹介しょうかいしてほしいということ。

問八 — 線部8 「彼はこうつぶやいている自分に気づく」とあるが、「こうつぶやいた」ではなく、このような言い方で表そうとしたのはどのようなことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本に関することとなるとだれが相手でもついつい真剣に論じてしまい、マヤがうなずく姿を見て初めて自分が語りかけた相手がまだおさない子供だったと思ひ、はっとしたということ。

イ マヤに文学的な絵本を読ませるため、それまで関心のなかった絵本についてわき目もふらず調べているうちに、いつの間にか自分が追い求めていた絵本に出会っていたということ。

ウ マヤのたを思つて絵本の専門家になろうと努力してきたつもりだったが、いつの間にか自分の絵本に対する価値観をマヤにおしつけるようなことを言つてしまつていたということ。

エ マヤに文学的な絵本を読ませたい一心で、それまで関心のなかった絵本の世界にのめりこみ、目の前にいるマヤが二歳の子供だということも忘れて思わず語りかけていたということ。

問九 — 線部9 「ひんぱんに訪れる、訪れる口実に本を買つ」とあるが、ランビアーズ署長が店を訪れる本当の目的とは何か。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が読んだ本の感想をともに語り合つてくれるような話し相手を探したいという目的。

イ ご婦人がたのために開いている読書会を自分たち警官向けにも開いてもらいたいという目的。

ウ マヤがいつになったら正式にフィクリーの養女になれるかをいち早く確認したいという目的。

エ マヤの安全や成長ぶりを彼女に会うことで確認し、その愛らしさに直接触れたいという目的。

問十 — 線部10 「「たいした言葉を」ほんとうにそうだったのか?」とあるが、ここでのランビアーズの心の動きはどういうものか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア マヤが正式にフィクリーの「養女になった」という事実は喜ぶべきことだと思いつつも、ここはまず最初にマヤが「養女」という難しい単語を使ったことをほめることの方が先決だと、教育的な配慮はいりごころをしている。

イ マヤが「養女になった」という、非現実的なことをいきなり言つたので驚き、それを疑わしいとは思いつつも、ひとまず「養女」という難しい言葉を覚えたことをほめ、あとでフィクリーに実際の事実関係を確認している。

ウ 初めはマヤが「養女」というやや難しい単語を使ったことに感心したが、その後でマヤがフィクリーの「養女になった」という、より重要な事実におくられて気づき、あとから改めてより大きな驚きと喜びを感じている。

エ マヤがフィクリーの「養女になった」ことに驚き、喜びを感じたが、「養女」になることの意味を今ひとつ分かつていないマヤよりも、大人であるフィクリーとともに喜びを分かち合いたいと思つている。

問十一 — 線部11 「地域社会との強力な絆(すなわち本屋)」とあるが、フィクリーがマヤを養女とする上で有利に働く「絆」とは、具体的にどういう人たちがどのようなようにすることでできるつながりのことか。解答らんの文末「ことでできるつながり。」に合うように、六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

君たちは、

「夢を持ちなさい」

「夢のない人生には価値がない」

「夢を持たない人間は、誰にも愛されない」

「夢があつてこそ人は輝く」

てなことを信じているかもしれない。

というのも、昨今、ものわがりのよさげな大人は、誰もがイクドゥウォンに、

「自分だけの夢に向かって努力しなさい」

1 といった調子のお話を子供に吹き込む決まりになっているからだ。

この「夢」を中心に据えた教訓話は、ある時期から急に言われはじめたことで、私が子供だった頃は、さして人気のあるプロットではなかった。というよりも、私が子供だった50年前には、夢を持っている子供はむしろ少数派だった。事実、私は、自分が夢を持っていた記憶を思い出すことができない。

にもかかわらず、夢なんかなくても、子供時代は楽しかった。当然だ。子供は「いま、ここ」にあるがままにある存在で、その時々の一瞬一瞬を、その場その場の感情のままに生きている。その、あるがままの子供たちは、「将来の展望」や「未来への希望」を特段に必要としていない。彼らの生活は、「大人になるための準備」として運営されているのでもなければ、「夢への助走」として立案されたものでもない。子供であることの楽しさは、元来、そのところ（未来や過去と切り離されているところ）にある。

「夢」を持つことは、一見、前向きで素晴らしい取り組みであるように見える。しかしながら、注意深く検討してみると、「夢」は「未来のために現在を犠牲にする」要求を含んでいる。

ということは、「夢を持ちなさい」という一見素敵に響くアドバイスは、その実、「今を楽しむ」という子供自身にとって

最も大切な生き方を真つ向から否定する命令（具体的には「将来のために今の楽しみを我慢しなさい」ということ）でもあ
るわけで、とすれば、悪質な「夢」に囚われた青少年は、不確かな未来のために、かけがえのない思春期をダイナにし
ているのかもしれない。

自分の将来に「夢」を設定した人間は、その夢から逆算して、現在の生活を設計しなければならなくなる。

と、その子供の「現在」は、将来のための準備期間、すなわち「努力と忍耐の時間」に性格を変える。たとえば、プロ
サッカーの選手になることを心に決めた14歳は、部活の練習だけでは足りないと考え。と、彼は、放課後の2時間を自主
練習に当てる決意を固めなければならぬ。あるいは、東京大学に合格する目標を立てた12歳は、一日に8時間の勉強時間
を自分に課すかもしれない。

もし、君の抱いている夢が、自分自身の内側から自然に湧き上がってきた夢であるのなら、現在の娯楽や休息を多少犠牲
にしても、将来のために努力を傾ける価値がある。でも、もし仮に君の抱いている「夢」が、「夢を持たねばならない」
という義務感から無理矢理に設定したお仕着せの人生設計であるのだとしたら、ほかならぬ自分自身をがんじがらめにする
そんな不自由な夢からは、早めに目を覚ました方がよい。

5 若い頃に自分で「夢」だと思っていたものが、大人になった時点から振り返ってみると、ただの「虚栄心」だったという
例は珍しくない。自分で夢だと思っているそのことが、実は、現実を直視せずに済ますための事前弁解だったというケース
もある。そうでなくても、親しく行き来しているメンバーが、同じデザインの靴下を欲しがるとして揃えたがる
「夢」は、死刑囚の目からギロチン台を隠しておくための絵屏風とそんなに変わらない機能を果たしている。つまり、
「夢」は、なによりもまず、自分をだましたい人間が自分をだますために見る物語だということだ。

もうひとつ指摘しておきたいのは、「夢」という単語が、ほぼ必ず「職業」に結びつく概念として語られるようになった
のは、この30年ほどに定着した、比較的新しい傾向だということだ。

昭和の中頃まで、子供たちが「夢」という言葉を使う時、その「夢」は、もつと他愛のない、バカバカしいものだった。
というよりも、「実現可能」だったりするものは、はなから「夢」とは呼ばれなかった。であるから、「カンゴジ」になりた
いとか「編集者になりたい」といった感じの、実現に向けてコツコツと努力しなければならないタイプの堅実な「夢」は、

子供らしい生き生きとした「夢」とは見なされなかった。

それが、いつの頃からなのか、「夢」は、より現実的な「目標」じみたものに変質した。そして、現実的になるとともに、それは年頃の男女が、一人にひとつずつ必ず持っていなければならない必携のアイテムとして、万人に強要されるようになっていく。

6 なんだかつらい話だ。

本来なら、退屈な現実から逃避するためのヒーロー幻想であったり、叱られた小中学生がうたかたの慰安を求めて思い浮かべる絵空事であった「夢」という多分に無責任な妄想が、就職活動の面接における必須ワードになっていたり、中高生が考える職業選びの土台になっていたりする現状は、今年の秋に60歳になる私の目から見ると、あきらかにどうかしている。

21世紀にはいつて十数年が経過した現在、「夢」は、子供たちが「将来就きたい職業」そのものを意味する極めて卑近な用語に着地している。なんという、夢のない話であることだろうか。

結局、この30年ほどの間に、われわれは、より年の若い子供たちに、

「実現可能な夢を早い段階で確定しておきましょう」

という感じのプレッシャーを与える教育をほどこしてきたわけだ。ということはつまり、少なくとも平成にはいつて以来の社会の変化は、「夢」という言葉から夢が失われていく過程そのものだったということになる。

(中略)

13歳の段階の少年少女が、自分の得意不得意や、好奇心や、好き嫌いや、あるいは友達のマネやアニメの影響で、どんな職業に憧れるにせよ、その憧れは、どうせたいして現実的なお話ではない。

3年後には、たぶん笑い話になっている。

そういう、3年たつてから振り返って笑えるみたいな憧れを持つのは大変にケツコウなことだ。

というのも、憧れは、それに到達することによってではなくて、届かないことや、じきに笑い話になることによって、それを抱いていた人間を成長させるものだからだ。

ただ、

「この広い世界には、きっと自分に向いた仕事があるはずだ」

という思い込みを抱くことは、夢を持つこととは違う。それは人生の選択を狭めかねない。その意味で、あまりおすすめできない。

(中略)

職業信仰は、ある意味で、偏差値信仰や学歴信仰よりタチが悪い。

というのも、学歴や偏差値が、しよせんは数値化された一面的な能力の指標であるのに比べて、「職業」が物語る「能力」は、ずっと多岐にわたるからだ。

だから、職業を背景とした肩書信仰は、特定の職業に就いている者（あるいは職業に就いていない人間）への差別を生じさせる。

それ以上に、職業信仰は、「どこかに青い鳥（自分に向いた楽しくてやりがいのある仕事）がいる」という、空虚な不遇感の温床になる。その意味で実に厄介だ。

実際には、作業そのものに好奇心を抱かせる要素がなくても、いきいきと働いている人はたくさんいる。

たとえば、ネジのアタマがキントウに揃っているのかを検査するみたいなおよそ退屈にしか見えない仕事にでも、取り組んでいる人間は、それなりにいる。

よく似たなりゆきを、部活の練習で経験した生徒もいるはずだ。

作業や練習メニュー自体が退屈でも、毎日の繰り返しの中で成果があがれば、それなりに楽しくなってくることはある。

また、キツイサーキットトレーニングでも、気に入った仲間と一緒にこなしていれば、多少は楽しく取り組むことができる。

つまり「職業」そのものとは別に「職場」の善し悪しや向き不向きが、仕事の評価を変えることもあるということだ。

自分の気に入った職場で、気のおけない仲間と一緒に働くのであれば、与えられた役割をこなすというそれだけのことが、責任感と達成感をもたらすことになる。それ以上に、他人の目には瑣末な検品作業に見えるであろう仕事であっても、長年それに取り組んでいる人間からすれば、いわく言いがたい微妙な難しさがあるわけで、一定の経験を積めば、その難しさが

(他人から見れば単に「キツキ」にしか見えない何か)にチャレンジすることに誇りを感じるようになる。つまり、多くのベテランが言うように、仕事の素晴らしさやくだらなさは、ある程度の期間それに携わってみないとわからないということだ。

であれば、職業の名前で他人の能力を判断したり、自分に与えられている肩書きで自分の幸福度やプライドを計測することは、テストの点数で他人を値踏みすること以上に空しいということがわかるはずだ。

13歳の君たちは、とてもアタマが良い。

それだけに、¹⁰アタマだけで何かを判断することには慎重にならなければいけない。

仕事は、いずれ向こうからやってくる。

それまでの間は、なるべくバカな夢を見ておくことをおすすめする。

(小田嶋隆「13歳のハードワーク」)

㊦ プロット＝話の筋書き。

うたかた＝水面に浮かぶあわ。はかなく消えやすいものたとえ。

卑近＝日常的で手近な様子。

瑣末＝細かいことであり、重要でない様子。

問一 〰〰〰線部 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 〰 線部 1」といった調子のお話を子供に吹き込む決まりになっているからだ」とあるが、この言い方には筆者のどのような思いが表れているか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 多くの子供たちが大人に言われて夢を持つことは大切だと思いきんでいることへの驚き。
- イ 子供に夢を持たせることは、子供にとっては必ずしもよいこととは言えないという疑念。
- ウ 周囲の人たちが、子供に夢を持たせるよう指導すべきだと自分に強要することへの反発。
- エ 子供に夢に向かって努力せよと言うことは、大人にとって当然のことだという義務感。

問三 〰 線部 2「私が子供だった50年前には、夢を持っている子供はむしろ少数派だった」とあるが、それは当時がどのような時代だったからか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 子供が自分の将来のことを考える余裕がなく、今を生きることに精いっぱい時代だったから。
- イ 子供が今を純粋に楽しむことができたので、現実から逃避するための幻想が必要ない時代だったから。
- ウ 子供が感情のままに今を生きることができ、特に将来の目標を持つ必要がない時代だったから。
- エ 子供が今よりもずっと大人だったため、無責任な妄想をする子供がほとんどいない時代だったから。

問四 —— 線部 3 「『努力と忍耐の時間』に性格を変える」とあるが、なぜ「子供の現在」が「努力と忍耐の時間」になつてはいけないのか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア かけがえない子供時代を楽しむことは価値があるはずなのに、まちがった夢を追い求めることでその価値がなくなってしまうから。

イ 子供時代は夢中になって毎日を楽しむことが重要なのに、夢を持つことでそれを我慢して将来のために備えなければならぬから。

ウ 子供時代に過度な努力と忍耐を課すと、将来、実際に夢が手に届くところに来た時に全力で努力をする余力がなくなってしまうから。

エ 子供に将来のための努力と忍耐をさせるには、大人の助けがかなり必要になり、子供自身の力で夢を実現することにはならないから。

問五 —— 線部 4 「お仕着せの人生設計」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア それを目指すことで今の生活が充実する夢ではなく、今やりたいことを我慢して自分をがんじがらめにしなければならぬ夢のこと。

イ 自分の内側から自然に湧き上がってきた夢ではなく、周りが目指しているから自分も目指さなければならぬと感じて作りあげた夢のこと。

ウ 自分が本当に実現したいと思っていた夢ではなく、周囲の人に強制されて無理矢理目指すことになってしまった夢のこと。

エ 自分の中から自然に生まれた夢ではなく、将来なりたいたいのがなければいけないと思いきんで無理に作りあげた夢のこと。

問六 —— 線部 5 「若い頃に——」というケースもある」とあるが、「ただの『虚栄心』だったという例」や「事前弁解だったというケース」の具体例として適当なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 若い頃から歌手になりたいと思っていたが、大人になっていざ夢をかなえてみると、その仕事には自分が考えてもみなかった人間関係のしがらみなどがともなうということに気づいた。

イ 若い頃は純粹にスポーツ選手に憧れているつもりだったが、大人になって考えると、勉強をしなければならぬ現実から目をそらし運動に夢中になるふりをしていただけだったと気づいた。

ウ 若い頃から総理大臣になるのが夢だったが、大人になってから冷静に振り返ってみると、それが現実味のない夢であり自分にはとうてい無理な目標であったということに気づいた。

エ 若い頃から医者になりたいと願っているつもりだったが、大人になってみると、自分が本当になりたい職業は他にあったのに、目指せと言われたがために医者を目指していたということに気づいた。

オ 若い頃から裁判官になるのが夢だったが、大人になってから思い返すと、それを目指していることで自分が人から認められるだろうという考えでその夢を追いかけていたことに気づいた。

カ 若い頃は小説家を目指していたが、大人になってみると、ただ個人的に文学を楽しみたいだけで現実の職業として文学をやっていくほどの強い思い入れは持っていなかったことに気づいた。

問七 —— 線部 6 「なんだかつらい話だ」とあるが、現在の子供が「つらい」状況におちいってしまったのは、「かつて」と「現在」とで夢と現実との関係がどう変わってしまったからだと言っているか。六〇字以上、八〇字以内でまとめなさい。

問八 ——線部7「少なくとも平成にはいつて以来の社会の変化は（ ）ということになる」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 平成にはいつて以来、「夢」は大人が早期に子供に課す努力目標を指すようになり、子供はしだいに「夢」から逃避するようになってきたということ。

イ 平成にはいつて以来、「夢」という言葉そのものが使われなくなり、かわりに「職業」という言葉が多く用いられるようになってきたということ。

ウ 平成にはいつて以来、「夢」という言葉から明るい無邪気むじまきが感じられなくなり、それにともなって「夢」が話題にされなくなったということ。

エ 平成にはいつて以来、「夢」からのびのびした自由さがしだいに失われ、きゅうくつで手堅くてがた選択された職業を「夢」と呼ぶようになったということ。

問九 ——線部8「その意味で実に厄介だ」とあるが、なぜ「厄介」なのか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア たまたま今の仕事に向いていないだけで、自分にふさわしい仕事は必ずどこかにあると考えて、自分は恵まれていないと思うようになってしまふから。

イ 自分が職場で思うように評価してもらえないのは、仕事に対する経験がまだ足りていないだけなのに、簡単に今の仕事に見切りをつけてしまふから。

ウ いきいきと働くことができないのは、今の仕事が自分に合っていないだけなのに、自らの能力のなさを恥はじ、自分を追いこむことになりがちだから。

エ 学歴や偏差値で他人におくれをとっている人たちにとって、肩書きでしかその評価をくつがえすことはできないため、職業に対する信仰心が強くなるから。

問十 ——線部9「作業そのものに好奇心を抱かせる要素がなくても、いきいきと働いている人はたくさんいる」とあるが、なぜ「いきいきと」働けるのか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どういう職業、どういう作業内容であるかということではなく、その職場で自分がどれだけ責任ある地位につくことができるかということが重要であるから。

イ 作業の内容そのものは単純である方がかえって職場での人間関係を良好に保っていきやすく、仲間と力を合わせて仕事をすると楽しさや充実感を得やすいから。

ウ 複雑で高い能力を必要とする仕事よりも、かえって退屈にしか思えない単純な作業の方がより微妙な技術を必要とし、やりがいの感じられる仕事であるから。

エ 職業や作業そのものの楽しさとは別に、職場環境かんきょうや一見単純できついだけの仕事の中にも見つけられるやりがいによって、仕事に対する満足度は上がるから。

問十一 ——線部10「アタマだけで何かを判断することには慎重にならなければいけない」とあるが、筆者がここでこのように言っているのはなぜか。「アタマ」と対になる本文中の漢字二字の熟語を探し、それを必ず用いて解答らんの書き出しと文末「仕事の価値は、（ ）から。」に合うように、二〇字以内で答えなさい。

平成二十九年 一般入試① 国語解答用紙(1)

受験番号

氏名

	①
	②
	③
	④
	⑤

◆右のらんには何も書かないこと。

	解答用紙2
--	-------

合計

問十	問七	問四	問一
	問八	問五	問二
	問九	問六	問三

問	士			
ことのできるつながり。				
	80	60		

